# 描かれる王権

## ―『年中行事絵巻』の制作に関する一考察―

北京外国語大学
北京日本学研究センター
潘　蕾

要旨：

日本において、上皇が朝政を主導した院政時代は、荘園公領制の確立、国政での武家の地位の向上などの動きから、古代の残光と中世の曙光を共に内包する日本歴史上の一大転換期と見なされる。美術に主眼を置くならば、この時代の美術は、「奥行きがあり、稀に見る多産で創造性に富んだものということができる」（辻惟雄『日本美術の歴史』、東京大学出版会、2005 年、p. 141）と評価される。従来の歴史研究においては、文献史料を中心として解明することが多かったが、近年は絵画史料を使って歴史研究を進める研究も増えてきた。本研究は、先行研究を踏まえたうえで、この時代に制作されたとされる物語絵『年中行事絵巻』にスポットをあて、そこに描かれ・語られるモノ、ヒト、コトの分析、ひいては絵画表現に含まれる観念、イデオロギーの分析を通じ、制作者がこの絵巻の制作を通じて当世及び後世の人々に如何なるメッセージを伝えたいのかを考察し、絵巻物制作と政治との関わり方を再検討してみる。